

カントリーハウスに誰が住むのか —— センセーション・ノベルに読み取る階級間闘争

坂 田 薫 子

序——カントリーハウスの読み解き方

十九世紀イギリス社会の特徴の一つは中産階級層の拡大だと言われている。十八世紀半ばに始まり、イギリスを「世界の工場」へと発展させた産業革命によって、中産階級は富を蓄えていった。それにもかかわらず、選挙権がないために、自分たちが政治に影響力を持っていないことを不満に思い、彼らはトーリー党による土地所有者たちの支配にピリオドを打とうと動き出した。その成果は1832年の第一次選挙法改正となって現れる。これにより、商業にたずさわる都市部の中産階級層は念願の選挙権を手に入れることになる。ただし、この改正によって、中産階級出身者の議員が増大したということではない¹⁾。選挙権を持った一部の中産階級層が議員を選ぶ際に、候補者の政策を重視するようになることで、彼らの意見や考えが政治に反映されるようになったのである。その一例が1846年の穀物法廃止である。これを契機に、農業不況など、その後の様々な要因も重なって、農業経営者は次第に力を失い、産業資本家と商人たちが力をつけることになっていく。他方、労働者階級に目を向けると、1832年の改正では、中産階級に協力したものの、労働者たちは何の権利も与えられなかった。その不満からチャーティスト運動が盛んになり、1867年の第二次選挙法改正では都市労働者に、1884年の第三次選挙法改正では農業労働者にも選挙権が広がることになった。このように、十九世紀は、特権階級に権力が集中していたそれまでの多分に貴族的な世界から、自由主義に基づく民主主義的政治が確立していく世界へと、大きな方向転換を行った変革期であった。

こうした階級間闘争の中であって、ヴィクトリア朝の作家たちはどの階級の動向を好意的に見つめていたのだろうか。土地が権威の象徴であり（D. C. Moore, “Aristocracy” 378-379; “Gentry” passim）、地所を手に入れることが成功の証しであった（Moore, “Aristocracy” 374）当時、ジェントリー階級の直ぐ下に位置していた中産階級最上層の人々は、ジェントリー階級と見なされるための第一要件であった土地を手に入れることで、階級移動を可能にしていた（Richard D. Altick 28, 33）。そうした事実を踏まえ、1970年代、レイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams）はその著書『田舎と都会』（*The Country and the City*, 1973）において、文学作品で描かれるカントリーハウスを、階級間闘争の場所として読み解いてみせた。こうしたマルクス主義批評に準拠すると、小説において、物語の最後で誰がカントリーハウスに住むことになるのか

に、作者の階級間闘争への何らかの回答が示されていることが大いに期待されることになる。そこで、本稿では、1860年から62年の間に相次いで出版された三つのセンセーション・ノベル、『白衣の女』（*The Woman in White*, 1860）、『イースト・リン』（*East Lynne*, 1861）、『レディ・オードレイの秘密』（*Lady Audley's Secret*, 1862）に描かれたリマリッジ・ハウス（Limmeridge House）、イースト・リン、オードレイ・コート（Audley Court）というカントリーハウスの相続劇に着目し、これらの作品に込められた、ウィルキー・コリンズ（Wilkie Collins）、エレン・ウッド（Ellen Wood）、メアリ・ブラッドン（Mary Elizabeth Braddon）の階級問題への回答を考察してみたいと思う。

1. 『白衣の女』——カントリーハウスの相続劇

1.1. ジェントリー階級の限界

『白衣の女』におけるカントリーハウスの相続劇を論じるためには、第一巻に登場する事務弁護士ギルモア（Vincent Gilmore）の手記の第三章（146-156）で詳しく説明されているローラ・フェアリー（Laura Fairlie）の財産相続権について確認することから始めるのが最も適当であろう。

ローラの財産は叔父フレデリック（Frederick Fairlie）が亡くなったときに相続する可能性のある不動産と、彼女自身が成人に達したときに必ず相続することになっている動産からなる。まず前者について説明すると、ローラは地所リマリッジの推定相続人で、現在独身で嫡出子のいない叔父がこのまま死去した場合、彼女はリマリッジの生涯不動産権（言い換えれば、地所から上がってくる利子、年三千ポンドを自由に使用する権利）を相続する。彼女自身が独身のままか、子どもを残さずに死去すると、リマリッジの生涯不動産権はいとこのマグダレン（Magdalen Fairlie）のものになり、夫よりも先に死去すると、年三千ポンドの利子の権利は夫のものになる。また、男の子が生まれれば、その子どもがリマリッジという不動産を相続することになっている。

次に動産権について説明すると、ローラは成人に達すると、二万ポンドの動産と一万ポンドの生涯財産権の二つを相続することになっている。二万ポンドの方は、パーシヴァル・グライド准男爵（Sir Percival Glyde）との間で結ばされた不当なマリッジ・セトルメントにより、彼女の死後、元本も利子もサー・パーシヴァルのものになることになっている。また、一万ポンドの方は、彼女の死後、おばのエレノア・フォスコ伯爵夫人（Madame Eleanor Fosco）のものになり、エレノアの死後はいとこのマグダレンのものになることになっている。

長々と説明したものの、実は、サー・パーシヴァルとフォスコ伯爵（Count Fosco）の犯罪が一時的にローラから奪った財産は後者の動産のみである。確かに二万ポンドの動産はサー・パーシヴァルの手に渡り、一万ポンドの生涯財産権はエレノアの手に渡ったが、前者の不動産に関しては、フレデリックが生きているので、リマリッジ・ハウスも、そしてそれを内包する地所から出る年三千ポンドも二人の犯罪行為によって害を被ることはない。リマリッジ・ハウスというカントリーハウスの乗っ取りは、叔父フレデリックが健在である以上、遂に果たせずに終わっている。この小説の中で成功しているカントリーハウスの不当な相続があるとしたら、それは非嫡出子の息子による、ブラックウォーター・パーク（Blackwater Park）という准男爵家の地所の乗っ

取りということになる²⁾。

しかし、サー・パーシヴァルによるブラックウォーター・パークの相続が不当なものであったのは、非嫡出子の陰謀によるものというよりは、正式な結婚をせずにサー・パーシヴァルを儲けた父フェリックス・グライド准男爵 (Sir Felix Glyde) と母セシリア・ジェイン・エルスター (Cecilia Jane Elster) の世代の責任である。もちろん、サー・フェリックスが正式な結婚をすることが叶わなかったのは、セシリアが世の中の夫たちに有利であった当時の法律のせいで、自分を虐待する夫と離婚できなかったことに原因がある以上、真の非難の矛先は当時の法律に向けられるべきであったのも確かであるが、しかし、生まれてくる非嫡出子の将来を考えずに実質的な夫婦として生きることを選択した二人は、子どもに対して無責任であったと言わざるを得ない。そう考えると、サー・パーシヴァルの非嫡出子性は、非嫡出子サー・パーシヴァルのモラルを問うための設定というよりもむしろ、父親サー・フェリックスが属するジェントリー階級のモラルを問うための設定と見なすべきであるように思われる。

実のところ、ウォルター・ハートライト (Walter Hartright) が嘆くように (553-554)、ローラの父フィリップ・フェアリー (Philip Fairlie) が浮気な性格でなかったら、ある邸宅の使用人であったキャセリック夫人 (Mrs. Jane Anne Catherick) との間に私生児を儲けることもなく、その私生児アン (Anne Catherick) がローラと瓜二つであったために可能になった恐ろしい犯罪も生じ得なかったわけである。つまり、父親の罪が二人の娘を被害者にしてしまったのだ。『白衣の女』の三人の異父母姉妹について分析するメイ (Leila Silvana May 87-88) は、この作品がセンセーショナルである真の理由は、ジェントリー階級のローラと労働者階級のアンが姉妹であるという階級差の消滅にこそ存在すると指摘しているが、その原因を作ったのは二人の父親であるフィリップである以上、こうした設定も、フィリップの属するジェントリー階級の不道徳を問いたす効果を持っている。

さらに、フィリップの弟であるフレデリックも自己中心的性格の権化のような人物で、姪ローラの安否など意に介さない。書斎から一步も外に出ず、美術品の収集に興じているこの人物は、リマリッジ・ハウスというカントリーハウスを内包する自らの地所の経営にかかわっているようにも、あるいは関心があるようにも思われぬ。ローラのリマリッジ・セトルメントに何ら関心を示さないフレデリックの態度は、叔父としての親族愛に欠けている姿の象徴であるというよりもむしろ、リマリッジという地所が自分の死後、誰の手に渡るのか、そして誰かの手に渡った後どうなるのかということに対して、完全に無頓着であることを指し示している。フレデリックの無責任さは、叔父としての無責任さに留まらず、カントリーハウスの当主、リマリッジという地所の領主としての無責任さにまで及んでいることが分かる。

文学作品におけるカントリーハウスの伝統を論じる際に欠かせないのは、十七世紀に流行したカントリーハウス・ポエムであるが、フォウラー (Alastair Fowler 21) によると、カントリーハウス・ポエムにおいて、地所とはイギリスという国全体の見本となっていたという。こうした研究から、文学作品におけるカントリーハウスとは、イギリスという国家のあるべき姿を象徴する機能を果たしてきたことがうかがえる。となると、そうしたカントリーハウスを統治できる当主には、作者がイギリスの将来を担うに相応しい人物像と考える理想像が投影されていると見なすことが可能になる。

そう認めると、存命中にサー・パーシヴァルをブラックウォーター・パークの正式な後継者にするための努力を怠ったサー・フェリックスも、また、一時の快楽に身を任せ、婚外子を儲け、その結果リマリッジ・ハウスを危険に晒したフィリップ・フェアリーも、そしてリマリッジの行く末に何の関心も示さないフレデリック・フェアリーも、カントリーハウスを統治するには実に不適切な人物として、そしてイギリスの将来を担うには不適当な階級として切り捨てられていると考えられる。

1. 2. 上流階級から中産階級へ

それでは、彼ら三人が属するジェントリー階級が非難の矛先にあるのなら、この作品でジェントリー階級の代わりにイギリスの未来を託されている階級とは何であろうか。それはローラを窮地から救い出し、彼女との間に、正式にリマリッジ・ハウスを相続する権利を持つ息子を儲けるハートライトが代表する中産階級であろう³⁾。

ハートライトが地所リマリッジを治める領主となるのに相応しい人物であることは、ローラの復権を宣言するために彼が選んだ場所と相手に象徴されている。彼は議会や法廷ではなく、周囲のジェントリー階級の大地主たちの前でもなく、リマリッジの借地人(“tenants,” 619)たちをリマリッジ・ハウスに呼び集め、彼らに対してリマリッジの推定相続人としてのローラの復権を宣言し、また彼らにローラの正当な相続権を認めさせている。まず年老いた借地人に歓呼の声を挙げさせ、続いて農場主(“farmers,” 619)の妻たち、子どもたち、農業労働者たち(“labourers,” 619)にローラを称えさせ、そして墓碑銘を訂正するときには、村人たち(“villagers,” 619)を証人として呼び集めている。これにより、ハートライトはその後、ローラと自分の間に生まれる息子をリマリッジの次期の相続人として認めさせることに成功しているわけである。

ハートライトはリマリッジ・ハウスを、サー・パーシヴァル、フィリップ・フェアリー、フレデリック・フェアリーという、それぞれ異なった形で腐敗したジェントリー階級の手から守り、リマリッジに住む人々との結束を固めた上で、ローラの夫として、そしてリマリッジの相続人となる息子の父親として、ローラ救出劇での彼の活躍が既に証明していたように、今後も怠惰や快楽に身を委ねることなく、勤勉、実直という中産階級ならではの自らの価値観を持ち込みながら、地所リマリッジと、カントリーハウス、リマリッジ・ハウスを正しく統治していくことが期待されている⁴⁾。

ハートライトは、上流階級に属するジェントリー階級と、労働者階級に属する農業労働者を結び付ける中間層、中産階級の代表として、リマリッジ・ハウス、ひいてはイギリスという国家の将来を担うことを期待されているのである。カントリーハウスは階級間闘争の場であるというウィリアムズの主張を重ね合わせれば、ハートライトの血を引く嫡出子がリマリッジの正当な相続人となることを選択した作者コリンズは、中産階級の台頭を肯定的に描いていると言えるだろう。

2. 『イースト・リン』——エレン・ウッドの保守性

2. 1. 貴族階級からアッパー・ミドル・クラスへ

カントリーハウスは階級間闘争の場であるとするウィリアムズの主張を裏付けるかのよう

物語の冒頭、田園の地所、イースト・リンは、その家屋ごと、財政破綻に陥った貴族、マウント・セヴァーン伯爵（Earl of Mount Severn）から、近隣の町、ウエスト・リン（West Lynne）に住むアップパー・ミドル・クラスの事務弁護士、アーチボルド・カーライル（Archibald Carlyle）に売却される。

しかし、『イースト・リン』におけるカントリーハウスの相続劇にはもう少し詳しい説明が必要であろう。実はロード・マウント・セヴァーンも、生まれながらの貴族ではなく、二十五歳まではウィリアム・ヴェイン（William Vane）として、ロンドンの法学院で勉学に励んでいた一法律家に過ぎなかったのだが、幾つもの偶然が重なり、伯爵の爵位を相続することになったのである。そして、イースト・リンも、爵位と共に受け継いだ土地ではなく、彼が三十一歳のときにたまたま購入したものに過ぎず、限嗣不動産相続の縛りがなかった。そのためにロード・マウント・セヴァーンは自らの裁量で秘密裡にイースト・リンをカーライルに売却できたわけである。

このように、（少なくとも）この作品（の冒頭）において、カントリーハウスは、簡単にお金で売買される商品と化しており、カントリーハウス・ポエムから続く、イギリスの貴族階級の旧き良き伝統的価値観を体現する場所、あるいは、イギリスの旧き良き貴族的伝統を後世へと受け継いでいく象徴としては、もはや機能していないことがうかがえる。

また、ロード・マウント・セヴァーンは、その本拠地であるウェールズのマウント・セヴァーンや、イースト・リンに滞在することはほとんどなく、ロンドンのタウンハウスに入り浸り、湯水のように財産を使っていた。カントリーハウスが既にお金で簡単に売買される商品になってしまっていることのみでなく、ロード・マウント・セヴァーンは不在領主であり、まともにその地所の運営ができなくなっている、あるいは最初から運営にかかわっているようには思われえないという設定からも、イギリスにおける貴族的な上流階級の価値観は、イギリスという国家を下支えする基盤からは程遠く、既に中身のない形だけの代物に成り下がっていることがうかがえる。

こうしたカントリーハウスを購入し、文字通り灯りを点し、その見事な采配で再生させるのは、アップパー・ミドル・クラスに属するカーライルである。借金まみれのロード・マウント・セヴァーンが当主だった時代には長い間閉じられ、活気のなかったイースト・リンは、カーライルによって活気付き、（時として口うるさい姉コーネリア（Cornelia Carlyle）の存在で騒がしいものの、）子どもたちの笑い声が響く家庭的な場所へと変身を遂げる。ここに、退廃した貴族階級によって形骸化してしまっていたイギリスという国家に生命を吹き込むアップパー・ミドル・クラス、という構図を読み取ることができる。イギリスという国家の未来を担うのは、貴族とジェントリーからなる上流階級から、アップパー・ミドル・クラスへと階級が移行していると解釈することが可能である。

さらに、カーライルは単に建築物としてのイースト・リンを手に入れるだけではなく、ロード・マウント・セヴァーンの一人娘、レディ・イザベル（Lady Isabel Vane）と結婚し、嫡出子を儲けることで、文字通り、名実共にイースト・リンの後継者となる。こうしたカーライルのいわゆる立身出世物語は、ヴィクトリア朝の中産階級の夢であり、カーライルはビジネスマンとして成功し、優れた人格ゆえに人々に尊敬された上に、イースト・リンというカントリーハウスを手に入れたことで、眼に見える形で自らのジェントルマン性を証明することに成功する⁵⁾。もちろん伯爵の爵位は遠縁のレイモンド・ヴェイン（Raymond Vane）に譲られるため、カーライル

に受け継がれることはないが、カーライルは貴族の娘と結婚することで、（後にレディ・イザベルの引き起こした醜聞によって離婚が成立し、無効になってしまうものの、暫くの間）マウント・セヴァーン家という貴族の家系図にその名を刻むことになる上、物語の最後では、娘のイザベル・ルーシー（Isabel Lucy Carlyle）が次のマウント・セヴァーン伯爵夫人になる可能性がほめかされている。

次に、形骸化した貴族の血を引くレディ・イザベルが、自ら引き起こした醜聞によってイースト・リンから排除されると、レディ・イザベルに代わって、カーライルの幼馴染であるバーバラ・ヘア（Barbara Hare）が後妻としてイースト・リンにやってくる。ヘア家はカーライル家のように経済的には繁栄していないが、ウエスト・リンの判事として人々に一目置かれているリチャード・ヘア（Richard Hare）もまたアッパー・ミドル・クラスに属する人間である。これにより、イースト・リンにおける上流階級から中産階級への価値観の移行が完了することになる。

2.2. アッパー・ミドル・クラスの限界

アッパー・ミドル・クラスの価値観が上流階級の価値観に取って代わる姿を象徴している、カーライル家とヘア家によるイースト・リンの「相続」は、次節で述べる『レディ・オードレイの秘密』におけるロウワー・ミドル・クラスから上流階級への侵略行為に比べれば、ヴィクトリア朝における想定内の、あるいは新興階級の人々の理想の枠内に納まった相続劇、下克上でしかないのかもしれないが、階級間に存在するはずの見えない壁を崩しかねない、センセーショナルな要素を多分に含んでいる可能性がある。特に、アッパー・ミドル・クラスに属するとはいつても、カーライルは法廷弁護士ではなく、それよりも地位の低い事務弁護士であるからなおさらである。本稿の「序」でも触れたとおり、第一次選挙法改正があったからといって、直ちに中産階級出身者が上流階級に取って代わって議員になったというわけではないときに、准男爵が事務弁護士と議席を争い、事務弁護士に味方する労働者の暴徒たちに辱めを受けた後に、圧倒的な票差で敗北を喫するのだから、かなり先達的である⁶⁾。

こうしたセンセーショナル性をほめかすように、実のところウッドも手放しでアッパー・ミドル・クラスによる上流階級への侵略行為を認めているようには思われない。なぜならば、『レディ・オードレイの秘密』の結末では、ロバート・オードレイ（Robert Audley）とクララ・タルボーイズ（Clara Talboys）の築いた、「妖精が住んでいそうなコテージ」（LAS, 445）での「中産階級の郊外の田園の生活」（Lyn Pykett 104）が理想化されて示されているが、『イースト・リン』においては、理想の夫婦として描かれているはずの中産階級のカーライルとバーバラにも、まだまだ改めるべき点が多々あるからである。ワイン（Deborah Wynne）は『イースト・リン』に中産階級の完全な勝利、中産階級による上流階級の征服を読み取ることを奨励するが、ウッドのカーライル夫婦の描写にはもう少し慎重になる必要があるように思われる⁷⁾。

作品内で何度も理想のジェントルマンであることが強調されるカーライルも、よく読むと理想の夫像からは程遠い⁸⁾。そもそも最初の妻を駆け落ちへと駆り立てる状況を作ってしまったのはカーライルである。カーライルは公の人としては文句の付け所のない完璧な人物として描かれている。しかし、レディ・イザベルの夫という私的な存在としては欠点が目立つ。仕事に重点を置くカーライルは、カーライル家という家庭において、妻の置かれた立場を思いやることができな

い。彼は妻がコーネリアにいじめ抜かれ、彼女の暴政に辛い思いを強いられていることに気が付かないばかりか、諸事情があったにせよ、幼馴染のバーバラとの度重なる「密会」の真の理由を、その一部であっても、妻に打ち明ける必要性に思い至ることもない。孤独と嫉妬に苛まれ、かつて淡い恋心を抱いていたサー・フランシス・レヴィソン (Sir Francis Levison) に誘惑され、幼い子どもたちを残して、大陸へと駆け落ちをするという取り返しのつかぬ罪深い行為を実行に移した報いは、当然レディ・イザベル本人が受けるべきものではあるのだが、レディ・イザベルを逸脱した行為へと駆り立ててしまったという点において、カーライルに非は何一つない考えるのは難しい。

大きすぎる代償を払って教訓を学んだカーライルは、二度目の結婚生活においては、姉に同居を諦めさせ、また妻には何一つ隠し事をしないという態度を貫く。しかし、彼にはまだ学ばねばならぬことがあるようだ。後妻バーバラが、先妻レディ・イザベルの子どもたちに母親としての愛情を注げずにいることに、カーライルが気付いている様子はない。長女のイザベル・ルーシーと遠縁のロード・ウィリアム (Lord William Vane) の間の擬似恋愛感情の存在に気が付き、心配しているのは、マダム・ヴィーン (Madame Vine) と名を変え、家庭教師としてイースト・リンに戻ってきたレディ・イザベルだけであるし、長男ウィリアム (William Carlyle) の真の病状に気付いているのもレディ・イザベルだけである。以前、姉コーネリアへの信頼が彼を盲目にしたために、姉と前妻との間に生じていた不和に気付くことができなかったのと同じように、今回も、後妻バーバラへの信頼が再び彼を盲目にし、彼は彼女と先妻の残した子どもたちの間に存在している溝に気付くことができない。最初の結婚生活で良き夫なることを学んだカーライルは、次は良き父親になることを学ぶ必要がある。

また、彼のバーバラへの信頼は、彼女の欠点を助長し、彼女を第二のコーネリアに変貌させかねない。意志を持たぬ人形のように美しかったレディ・イザベルが、内部から家庭を崩壊させる危険性を孕んでいたことで「家庭の天使」像を覆してみせたのと同じように、バーバラもまた、「家庭の天使」像を覆してしまう可能性を秘めたヒロインである。バーバラは、1880年代、90年代に登場する「新しい女」の要素を多分に秘めている。強い自我を持ち、暴君的な家父長制を敷く父親に挑み、表に登場することはせずとも、夫の公的な領分で男たちに協力し、誰よりも愛し、信頼している夫にさえ口答えすることができる。彼女のこの強靱さは、彼女を母である前に一人の女性に、そして妻や女である前に一人の人間にすることを可能にする。しかしこの自我の強さは、一歩間違えると他者を傷つけてしまう危険性を孕んでいる。その最も顕著な例が、先程述べたように、血の繋がらない娘、息子への冷たさとして現れる⁹⁾。小説の最後から二つ目の段落になっているという構成からしてインパクトが強い次の下りは、彼女の反省により好転する家庭の未来像というより、レディ・イザベルの娘イザベル・ルーシーと、息子アーチボルドの、今後も続く苦勞の多い幼少時代を予想させることを可能にしている。

“[T]here has been a feeling in my heart against your children, a sort of jealous feeling, can you understand, because they were hers; because she had once been your wife. I knew how wrong it was, and I have tried earnestly to subdue it. I have indeed, and I think it is nearly gone. I”—her voice sunk lower—“constantly pray to be helped to do it; to love them and care for them as if they were my own. It will come with time.” (624)

実は、この節の最初に触れたウィリアム・ヴェインによるロード・マウント・セヴァーンという爵位の相続に、カーライル家の危うさがほのめかされている。ウィリアム・ヴェインは爵位を相続するまで「勤勉で真面目で」(5)、彼を「怠惰と快楽」(5)に引きずり込むことは難しかったとされている。この性格描写は読者に提示されている現在のカーライルの態度と同じである。しかしウィリアム・ヴェインの隠された欠点はその「野心」(5)にあった。姉コーネリアと比較すると一目瞭然だが、カーライルも（そしてバーバラも）かなりの野心家である。イースト・リンを我が物とした彼も、一歩間違えば、ウィリアム・ヴェインと同じ道を辿る可能性があることがほのめかされているのだ。

浪費癖の激しかったロード・マウント・セヴァーンが死に、堕ちた女と化したレディ・イザベルが死に、殺人犯サー・フランシス・レヴィソンが終身刑となり、退廃した上流階級の貴族的価値観が一掃された後に、ウエスト・リン選出の国会議員となり、地域の理想の鑑のように崇め奉られるようになったジェントルマン、カーライルと、「新しい女」バーバラの作り上げるアッパー・ミドル・クラスの家もまた、不完全であり、今後も多くのことを学んでいく必要があるものとして、物語は幕を閉じているのである。しばしば、堕ちた女レディ・イザベルに容赦のない、残酷な死を用意した点に、ウッズの保守性が指摘されるが、カントリーハウスの相続劇にヴィクトリア朝の中産階級の夢を実現させておきながら、そうした夢を実現させたアッパー・ミドル・クラスの夫婦を、必ずしも理想像として描いてみせてはいない点にも、彼女の保守性を見出すことができるだろう。

3. 『レディ・オードレイの秘密』——この小説が「センセーショナル」である理由

3. 1. 上流階級からアッパー・ミドル・クラスへ

ウィリアムズが主張するように、カントリーハウスが階級間闘争の場であるとするならば、ロバート・オードレイが執拗にレディ・オードレイ（ルーシー・グレアム (Lucy Graham)、本名ヘレン・タルボーイズ (Helen Talboys)、旧姓モールドン (Maldon)) を追い詰める動機の一つは、ジェントリー階級¹⁰⁾の館、オードレイ・コートが、ロウワー・ミドル・クラス出身のヘレン・モールドンの手に渡らないようにすることにあったとすることができるだろう。ヘイニイ (Aeron Haynie) も、『レディ・オードレイの秘密』は、「貴族階級のカントリーハウスとその地所の神聖さが比喩的に中産階級によって侵略され、汚染されるかもしれないというヴィクトリア朝中葉の恐怖」(64)を描いていると述べている。

しかし、レディ・オードレイを排除した後、サー・マイケル (Sir Michael Audley) は二度とオードレイ・コートに戻ることはなく、さらには次にオードレイ・コートを相続する権利を持つ

法廷弁護士のロバートも、ロンドン郊外に妻クララと子どもと、そして妻の兄ジョージ (George Talboys) とその子どもジョージ (Georgey Talboys) と共に新居を構え、オードレイ・コートに移り住むことはない。なぜ、『レディ・オードレイの秘密』では、最後にカントリーハウスが正当な相続人の手に戻らないだけではなく、相続そのものが放棄されているのだろうか。この結末に込められた作者ブラッドンの意図を、階級間闘争という視点から探ってみよう。

まず、センセーション・ノベルの研究者の一人であるパイケット (Lyn Pykett) の解釈を参照してみる。パイケットは、サー・マイケルによるオードレイ・コートの放棄は、ロバートの浄化活動をもってしても、「貴族階級の家庭の復権は果たせない」(104) ことを示していると述べている。彼女は、物語の焦点が「妖精が住んでいそうなコテージ」(LAS, 445) での「中産階級の郊外の田園生活」(104) に移っていることに着目し、「ロバート、クララ、ジョージ、そしてそれぞれの子どもたちの理想化された家族が、サー・マイケルの貴族階級の家庭に取って代わっている」(104) と、物語の支持する価値観が、貴族階級のものから中産階級のものへと移行していると指摘している。ここで、パイケットが指摘している価値観の移行とは、上流階級からアッパー・ミドル・クラスへのそれである。これは、ウッドによって描かれたイースト・リンの相続劇の象徴していたものと同じである。

3. 2. ロウワー・ミドル・クラスへ

しかし筆者は本節で、『レディ・オードレイの秘密』のカントリーハウスの相続劇の中に、さらに、ロウワー・ミドル・クラスの価値観の侵略の予告を読み取る可能性を示唆するつもりである。そのために、ここで、もう一度物語の結末を確認しておこう。

サー・マイケルは、レディ・オードレイにかかわる醜聞が表沙汰になるのを恐れて、彼女の重婚、殺人 (未遂)、そしてガキ括弧付きの「狂気」と、それを根拠とした彼女のマッド・ハウスへの収容 (と、そこでの死去) を隠したまま、レディ・オードレイと過ごした忌まわしい思い出の残る場所、オードレイ・コートを去り、娘婿のカントリーハウスのある地所の隣に土地を買い、そちらに引っ越していく。長い間そこを管理してきた老いた家政婦に託され、オードレイ・コートは閉じられる。しかし実はその家政婦は、サー・マイケルらには内緒で、時々訪問客に家の中を見学させている。生前のレディ・ルーシー・オードレイを忠実に写し取った肖像画は、カーテンが掛けられてはいても、まだオードレイ・コートに飾られており、訪問客たちはカントリーハウス・ツアーに興じながら、外国で夭折した美しきレディ・オードレイに思いをはせる。真実が隠蔽されている以上、彼らの目から見ると、レディ・オードレイはヘレン・モールドンではなく、あくまでも美しきルーシー・グレームであり、ヘレンはいつまでもレディ・オードレイとして人々に記憶されることになる¹¹⁾。

オードレイ家がヘレンの犯罪を隠蔽せずに、犯罪者として彼女に法の裁きを受けさせていれば、オードレイ家の歴史から彼女の痕跡は一掃され得ただろうが、彼女の重婚の犠牲者となったサー・マイケル (とその甥ロバート) がそれを公開することを一家の恥と考え、隠蔽したとき、彼女の名は少なくとも、訪問客に代表される他者たちの想像するオードレイ家の家系図には、しっかりと刻まれることになる。サー・マイケルは、オードレイ・コートを忌まわしい過去を思い出させる場所と考えるのなら、肖像画を焼き払い、内部を改装するなどして、ヘレンとの過去

をオードレイ・コートから消し去るべきだったのだが、それをせず、自らがカントリーハウスを放棄することで、言わば比喩的に、ヘレンにカントリーハウスを明け渡してしまっている。

もちろんサー・マイケルとルーシー（ヘレン）の間に子どもは生まれていないため、ロウワー・ミドル・クラスに属するモールドン家の血が、准男爵家のオードレイ家に受け継がれていく未来は存在しない。しかし、たとえオードレイ家はモールドン家の生物学上の侵略を避けることができたとしても、モールドン家の血はタルボーイズ家という別のジェントリー階級の一族に受け継がれていくことは免れない。なぜならば、ヘレンとジョージ・タルボーイズの息子ジョージは、タルボーイズ家に嫡出子として迎えられているからである。物語の結末では、傷心のジョージは妹夫妻（クララとロバート）と共にロンドン郊外に住んでいるが、兄妹の父親、ハーコート・タルボーイズ（Harcourt Talboys）が亡くなれば、当然ドーチェスターの地所を相続するのは長男のジョージ、そしてその長男のジョージということになるのだ¹²⁾。ヘレンの野心は、自らが貧困から抜け出し、安楽な生活を送ることではなかった。息子の安否に無関心だった彼女に、中産階級による上流階級の乗っ取りといったような、いかにもマルクス主義的大望を見出そうとすることには無理があるだろう。しかし、このセンセーション・ノベルに、ウィリアムズに倣って、カントリーハウス小説で重要視されている階級間闘争を読み取ろうとすれば、マッド・ウーマンとして排除されたはずのヘレンの息子が、ジェントリー階級の一族の家系図に嫡出子として入り込んでいる事実は、見逃してはならない展開となる。

『レディ・オードレイの秘密』が1860年代物議を醸した一連のセンセーション・ノベルの代表作と見なされたのは、ヴィクトリア朝の「家庭の天使」としての理想の女性像を絵に描いてみせたようなルーシー・グレアムが、実のところ恐ろしい犯罪に手を染め、言わばヴィクトリア朝の聖域であった家庭を内側から崩壊させる存在であった点にあるのは間違いない。しかし、そうした危険分子ヘレン・モールドンを、当時彼女のような存在が送り込まれる場所、マッド・ハウスに閉じ込めることで一見排除できたかのように見える結末に隠されている、階級の揺らぎという、別の形での社会の価値観の転覆こそが、この小説がセンセーショナルと見なされるべき理由なのではないか。こうした『レディ・オードレイの秘密』の結末の大胆さは、『イースト・リン』において、ロウワー・ミドル・クラス出身のアフィー・ハリジョン（Afy Hallijohn）が、ジェントリー階級やアッパー・ミドル・クラスの男性たちとの結婚を目指したものの、レディ・イザベルに勝るとも劣らない醜聞ゆえに、結局は自分と同じ階級の男性との結婚で満足しなければならない結末を用意したウッズの保守性と比較してみると、より明らかになるだろう。将来タルボーイズ家のカントリーハウスを相続するジョージ・タルボーイズには、半分ヘレン・モールドンの血が流れている。別のカントリーハウス、オードレイ・コートからは排除されたかに見えた異分子ヘレンの意志は、「郷土タルボーイズ家の地所」（Squire Talboys）と呼ばれる土地に建てられたカントリーハウスを相続するジョージによって、確かに受け継がれていくのだ。

カントリーハウスがイギリス国家を象徴し、その当主がイギリス国家を統治すべき理想像を指し示す象徴だとすると、肖像画と人々の記憶という形でオードレイ・コートに、さらには血統という形でタルボーイズ家のカントリーハウスに、ロウワー・ミドル・クラスの血が入り込んでいるブラッドンのこのセンセーション・ノベルでは、英国性を象徴すべき階級の範疇に、ロウワー・ミドル・クラスまでもが含まれる未来が暗示されていることになる。これは当時としては

少々急進的な考え方であり、センセーションを引き起こしかねない主張と考えられる。アッパー・ミドル・クラスによるカントリーハウスの運営でさえ手放しで認めているようには思われないウッドの態度と比べると、ブラッドンの描く世界は、ヴィクトリア朝の読者の目には実に急進的に映ったに違いない。物語の最終章での、サー・マイケルのオードレイ・コートtの放棄は、実はこうしたセンセーショナルな読解の可能性を、間接的に読者に伝えるための、ブラッドンの策略だったのではないだろうか。

結びとして

センセーション・ノベルについて論じる研究者がよく引用する論文、『『センセーション・ノベル』の何が『センセーショナル』か?』(“What Is ‘Sensational’ about the ‘Sensation Novel’?”, 1982)において、ブラントリンガー(Patrick Brantlinger)は、センセーション・ノベルのセンセーショナル性は、「一見したところ好ましいブルジョワ家庭における、不倫や重婚の結果引き起こされる犯罪、特に殺人を扱う」(1)という内容に存在し、一流のセンセーション・ノベルには「ひとつ、ないし幾つかの秘密が隠されている」(1)と指摘した上で、1860年代という時代性、ナレーターの信頼性のなさ、心理分析という三つの視点からセンセーション・ノベルの分析を行っている。そして結論部では、センセーション・ノベルは、「ヴィクトリア朝のブルジョワ階級の価値観の頼み綱」(26)である家庭に隠された秘密を明らかにする点において、「政治問題を扱うことをしないのに転覆的である」(26)と述べている¹³⁾。確かに、『白衣の女』ではサー・パーシヴァルとフォスコ伯爵によるローラとアンの摩り替えが、『イースト・リン』ではサー・フランシスによるハリジョン氏殺害が、『レディ・オードレイの秘密』ではレディ・オードレイの重婚と殺人未遂が、物語の「秘密」として機能し、ブラントリンガーの定義を満たしている。

しかし、本稿で考察したように、三作品は、実はブラントリンガーがセンセーション・ノベルは扱っていないと考えている「政治問題」を巧みに取り込み、階級に関する既存の価値観に疑問を投げ掛けている点でも「転覆的」なのではないだろうか。『白衣の女』は本来支配者の立場にありながら、モラルに欠け、犯罪に手を染めていく上流階級の信頼性のなさを殊更強調する。また『イースト・リン』では、キャナダイン(David Cannadine)がその著作の序章で貴族と他を区別したものとして挙げている「富」、「地位」、「権力」の三つをアッパー・ミドル・クラスが脅やかす。そして『レディ・オードレイの秘密』は、ジェントリー階級の正当な相続人としてロウワー・ミドル・クラスの血を引く嫡出子にカントリーハウスが引き継がれていく可能性を示唆することで、拡大していく中産階級の底力を描いてみせる。ムア(D. C. Moore, “Gentry” 396)によれば、ジェントリー階級が急速に政治的影響力を失い始めるのは1870年代、80年代であり、キャナダインによると、貴族は1870年代でもまだその特権を享受しており、実際に目に見える形で没落を始めるのは1880年代であったという。ならば、センセーション・ノベルの流行した1860年代においては、中産階級が上流階級に取って代わる様子を描く、言わば予言的行為は、政治的に見て多分に急進的であったはずだ。すると、階級の「転覆」に対する人びとの不安を煽ることになりかねない展開を筋の中に盛り込んでいる点にも、これら三つの作品のセンセーショナル性を読み取ることができる。ブラントリンガー(5-6)はセンセーション・ノベルが扱う重婚、不

倫、離婚法に1860年代という時代性が象徴されていると指摘しているが、この三作品は、それと同時に、選挙法改正前後、ますます現実味を増していった階級移動の波を作品内に描くことによって、十九世紀ヴィクトリア朝世界を表象してみせているのだ。

以上のように、『白衣の女』、『イースト・リン』、『レディ・オードレイの秘密』の中に描かれたカントリーハウスの相続劇を分析すると、センセーション・ノベルの旗手と言われたコリンズ、ウッド、ブラッドンの共感は、もはや上流階級に向けられている様子はなく、程度の差こそあれ、彼らは新興階級である中産階級の価値観に共感し、中産階級にイギリスの将来を託そうとしていることが知れ、そこに三作品のセンセーショナル性を読み取る、新たな可能性に気付かされるのである。

注

- 1) 1865年の時点でも下院の658議席 (Bruce L. Kinzer 254) 中、220人がまだ貴族階級出身者か准男爵であった (Sidney Johnson 39)。地主層の議員数が商人や製造業者などの議員数に越されるのは1885年になってからのことである (F. M. L. Thompson 276)。なお、時代を追った下院における地主層の割合の変遷は、ムア (D. C. Moore, "Gentry" 396-397) を参照されたい。
- 2) バーンスタイン (Stephen Bernstein) が『白衣の女』のもう一つのカントリーハウス、ブラックウォーター・パークをゴシック小説に登場するカントリーハウスと比較していて興味深いので参照されたい。
- 3) サー・パーシヴァル亡き後、ブラックウォーター・パークを相続するのも遠縁の東インド会社の交易船の船長 (542) であり、こちらのカントリーハウスもジェントリー階級から中産階級へと引き継がれている。
- 4) 研究者の中にはハートライトを否定的にとらえる者もいる。例えばツヴェトコヴィッチ (Ann Cvetkovich) は、ハートライトの恋愛の裏に隠れた真の理由を探り出し、彼を上昇志向の顕著な人物としてとらえてみせる。彼の恋愛は、センセーション・ノベルとして描かれることによって、彼がローラの美しさという外見に一目惚れしたのではなく、彼女の地位と財産に惹かれたことがうまく隠されていると分析している。またパーキンズとドナフィー (Pamela Perkins and Mary Donaghy) も、ハートライトによる巧みな語りの操作を見逃さず、ヒーローとしての彼の限界を示唆している。
- 5) ヴィクトリア朝の中産階級の野心については、パイケット (Lyn Pykett 117)、クシチ (John Kucich 168-169)、ワイン (Deborah Wynne 66-74) をそれぞれ参照されたい。
- 6) クシチもこの点を重要視し、カーライルの出世の「先達的な」(169) な在り様に嫌味たっぷりのコメントを載せた出版当時の書評 (169) を紹介している。
- 7) ワインとは対照的にクシチは、『イースト・リン』には中産階級が社会的向上と引き換えにそれまで中産階級的美徳とされてきたモラルを失っていく様子が表されていると考え、この作品は中産階級の礼賛ではなく、職業人による競争社会の台頭と弊害を描いていると主張している。また、マンガン (Andrew Mangham 134-136) も、カーライル家の不幸はレディ・イザベルの制御の利かない情熱のみが引き起こしたものではなく、カーライルの象徴する中産階級の価値観の欠陥がもたらしたものと分析している。
- 8) 例えばカプラン (E. Ann Kaplan 87-88) はカーライルを中産階級の理想の男性像と見なしているが、他方クシチは、カーライルの高潔さは、本当は私欲のために動いていることを隠すための見せ掛けに過ぎないとし (178)、コーネリアとレディ・イザベルにこそ旧き良き中産階級的美徳を読み取ることができると主張する (170-172)。

- 9) ただし、大抵の研究者は、例えばカプラン (91) のように、バーバラを理想の母親像ととらえることを奨励している。
- 10) オードレイ家は准男爵家であり、貴族階級ではないため、本稿で筆者はオードレイ家をジェントリー階級と呼ぶが、本稿で引用する研究論文の中で、その著者がオードレイ家を「貴族階級」と描写している場合は、引用内ではそのまま「貴族階級」という表現を用いることとする。
- 11) パイケット (93) は、物語の最後で読者の注意が再びレディ・オードレイの肖像画に向けさせられることで、彼女が死後も、人を不安にさせる存在の象徴であり続けていることを印象付けるようになっていると指摘している。
- 12) モントウィーラー (Kathrine Montwieler 59) もこの点を重要視している。
- 13) ローズバーク (Jonathan Loesberg) は、プラントリンガーとは逆の立場を取り、センセーション・ノベルの語りの構造には、第二次選挙法改正の行われた十九世紀中葉のイギリスの政治上のイデオロギーを読み取ることができると論じている。

引用文献

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. New York: Norton, 1973.
- Bernstein, Stephen. "Reading Blackwater Park: Gothicism, Narrative, and Ideology in *The Woman in White*." *Studies in the Novel* 25.3 (1993): 291-305.
- Braddon, Mary Elizabeth. *Lady Audley's Secret*. 1862. Ed. David Skilton. Oxford: OUP, 1987.
- Brantlinger, Patrick. "What Is 'Sensational' about the 'Sensation Novel'?" *Nineteenth-Century Fiction* 37.1 (1982): 1-28.
- Cannadine, David. *The Decline and Fall of the British Aristocracy*. 1990. New York: Vintage, 1999.
- Collins, Wilkie. *The Woman in White*. 1860. Ed. Matthew Sweet. London: Penguin, 2003.
- Cvetkovich, Ann. "Ghostlier Determinations: The Economy of Sensation and *The Woman in White*." *Novel* 23.1 (1989): 24-43.
- Fowler, Alastair. *The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth-Century Estate Poems and Related Items*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1994.
- Haynie, Aeron. "'An idle hand that was never turned, and a lazy rope so rotten': The Decay of the Country Estate in *Lady Audley's Secret*." *Beyond Sensation: Mary Elizabeth Braddon in Context*. Eds. Marlene Tromp, Pamela K. Gilbert, and Aeron Haynie. New York: State U of New York P, 2000. 63-74.
- Johnson, Sidney. "Aristocracy and Gentry." *Victorian Britain: An Encyclopedia*. Ed. Sally Mitchell. New York: Garland Publishing, 1988. 38-39.
- Kaplan, E. Ann. *Motherhood and Representation: The Mother in Popular Culture and Melodrama*. 1992. London: Routledge, 2004.
- Kinzer, Bruce L. "Elections and the Franchise." *Victorian Britain: An Encyclopedia*. Ed. Sally Mitchell. New York: Garland Publishing, 1988. 253-255.
- Kucich, John. *The Power of Lies: Transgression in Victorian Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 1994.
- Loesberg, Jonathan. "The Ideology of Narrative Form in Sensation Fiction." *Representations* 13 (1986): 115-138.
- Mangham, Andrew. *Violent Women and Sensation Fiction: Crime, Medicine and Victorian Popular Culture*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007.
- May, Leila Silvana. "Sensational Sisters: Wilkie Collins's *The Woman in White*." *Pacific Coast Philology* 30.1 (1995): 82-102.
- Montwieler, Katherine. "Marketing Sensation: *Lady Audley's Secret* and Consumer Culture." *Beyond*

- Sensation: Mary Elizabeth Braddon in Context*. Eds. Marlene Tromp, Pamela K. Gilbert, and Aeron Haynie. New York: State U of New York P, 2000. 43-61.
- Moore, D. C. "The Gentry." *The Victorian Countryside*. 2 vols. 1981. Ed. G. E. Mingay. London: Routledge, 2000. 383-398.
- . "The Landed Aristocracy." *The Victorian Countryside*. 2 vols. 1981. Ed. G. E. Mingay. London: Routledge, 2000. 367-382.
- Perkins, Pamela, and Mary Donaghy. "A Man's Resolution: Narrative Strategies in Wilkie Collins' *The Woman in White*." *Studies in the Novel* 22.4 (1990): 392-402.
- Pykett, Lyn. *The "Improper" Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. London: Routledge, 1992.
- Thompson, F. M. L. *English Landed Society in the Nineteenth Century*. 1963. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: OUP, 1973.
- Wood, Ellen. *East Lynne*. 1861. Ed. Elisabeth Jay. Oxford: OUP, 2008.
- Wynne, Deborah. *The Sensation Novel and the Victorian Family Magazine*. Basingstoke: Palgrave, 2001.